

14:12 現在

<主要株価指数>

	終値	前日比
日経平均株価	15335.10	-26.06
N Y ダウ	16,921.46	14.84
D A X (独)	10,004.00	73.67
FTSE100 (英)	6,808.11	29.55
CAC40 (仏)	4,563.04	32.67

<外国為替>※

ドル円	101.84 円	-0.10 円
ユーロドル	1.3626 ドル	0.00 ドル

<長期金利>※

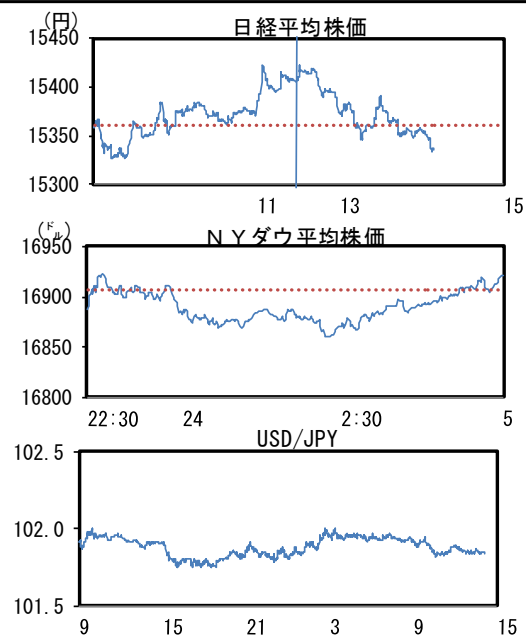
日本	0.588 %	-0.003 %
米国	2.621 %	0.036 %
英国	2.735 %	-0.005 %
ドイツ	1.321 %	-0.054 %
フランス	1.770 %	-0.076 %
イタリア	2.913 %	0.056 %
スペイン	2.717 %	-0.044 %

<商品>

N Y 原油	106.43 ドル	0.46 ドル
N Y 金	1313.70 ドル	41.30 ドル

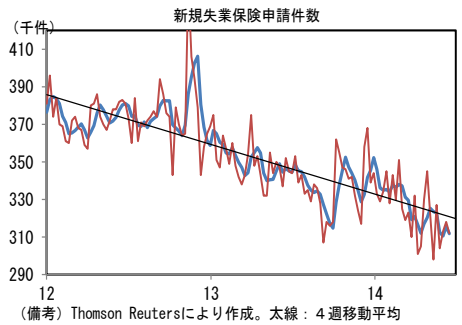
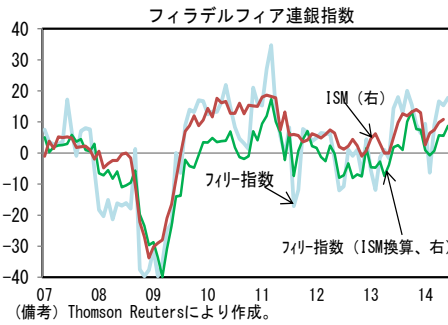
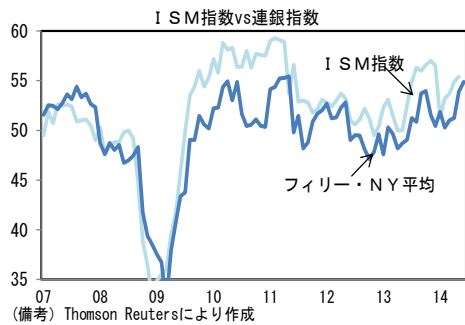
※は右上記載時刻における直近値。図中の点線は前日終値。

(出所) Bloomberg



【海外株式市場・経済指標他】 ～6月ISMも改善か～

- ・ N Y ダウ平均株価は前日比+14.84ドルの16921.46ドルで取引終了。
- ・ 6月フィラデルフィア連銀製造業景況指数は+17.8と市場予想(+14.0)に反して前月(+15.4)から一段と改善。ISM換算では54.4と昨年10月以来の高水準となった。内訳は出荷(+14.2→+15.5)、新規受注(+10.5→+16.8)が高水準から一段と改善したほか、雇用(+7.8→+11.9)も3ヶ月連続の改善。出荷遅延(▲4.2→+6.0)は押し上げ寄与となり、在庫(▲0.5→▲6.7)は減少した。総じてバランスが良く、ヘッドラインの改善以上にポジティブな印象だ。その他、6ヶ月先の景況指数(+37.4→+52.0)、設備投資計画(+24.4→+31.0)、雇用(+24.1→+31.4)も著しく改善。NY連銀指数(5月+10.44→6月+18.36)とフィリー指数をISM換算した上で合成した指数は54.9と前月(53.9)から上昇。6月ISM指数の更なる改善が見込まれる(5月:55.4)。
- ・ 新規失業保険申請件数は31.2万件と前週(31.8万件)から減少、市場予想(31.3万件)よりも強い内容となった。4週移動平均は31.18万件と景気後退後の最低更新をトライ。今回発表分は雇用統計調査週と重なるが、5月の同週対比(4週移動平均ベース)では1.1万件減少しており、この間、労働市場の改善が順調に進んだことを示唆している。6月雇用統計もNFP変化は20万人超となろう。



【外国為替相場・債券市場】～英小売売上高は予想どおりの反落～

- ・前日のG10通貨は北欧通貨の弱さが目立った以外に大きな動きはなかった。USD/JPYは米指標に反応することなく101.80-90付近で膠着状態。EUR/USDは一時1.36半ばまで上昇したものの、米金利が上昇に転じると1.36近傍まで水準を切り下げた。20日日本時間でUSD/JPYは101後半で一進一退となっている。
- ・米10年金利は+3.6bpの2.621%。米指標の予想上振れをきっかけに上昇を開始。欧州債市場は、FOMCを受けた米債市場に追随。独10年金利が▲5.4bpの1.321%となったほか、イタリア以外のほぼ全ての国でラリー。短期金融市場ではEONIAが0.015%と最低を更新、3ヶ月EURIBORも低下を続けている。経済指標では5月英小売売上高が前月比▲0.5%と予想に一致。もともと、5月の下落は4月の急増(+1.7%)からの反動による部分が大きく、悲観は不要。非食料品が+0.8%伸びている点もポジティブだ。小売売上高全体の3ヶ月前比年率は+5.3%と依然として高い伸びをキープしている。

【国内株式市場・経済指標他】～過熱感～

- ・日経平均株価は前日比+48.44円の15409.60円で前場の取引を終了。
- ・来週、日本株ラリーは小休止か。騰落レシオが144と過熱感の目安とされる120を大きく上回っていることから、さすがに利益確定売りが入り易いと思われる。ただ、これまでのところ国内外のマクロ指標に特段の悪材料は出でず、一方的に売り込む理由も乏しい。株価は一進一退か。

【注目点】～不快な夏は来ない～

- ・過去数年、米経済指標並びに金融市場は年央に雲行きが怪しくなるパターンが定着していたが、今年は様子が異なる。昨日は5月CB景気先行指数が前月比+0.5%の101.7と、2007年12月以来の水準を回復したほか、それを裏付けるかのように6月フィリー指数の6ヶ月先の判断項目が軒並み上向いた。この他、エコノミックサプライズ指数が4月をボトムに反発するなど、夏場にかけて景気のパターンが強まることを示唆する材料は多い。そうしたなかでS&P500は史上最高値を更新、NYダウも17000ドルを射程距離に入れ、“Sell in May”を崩した。一方、日本株は欧米株ラリーをよそに昨年来高値を抜けておらず、出遅れ感が目立つ。また、欧州株さえも下回るPERからは割安感も強く意識されるはずだ。やや消去法的な発想だが、消費増税に対する過度な懸念が織り込まれている可能性が高い。しかしながら、6月ロイター短観や5月の新車販売台数、百貨店売上高を見る限り想定を上回る反動減は生じておらず、日本株の出遅れを放置する正当性は乏しくなっている。米経済拡大をカタリストにしたリスクマネー拡大が見込まれるなか、消費増税に対する過度な懸念が後退、海外投資家を中心に日本株を物色する動きが強まると予想。

